香芝市埋蔵文化財発掘調査概報1

―― 平成5年度 ――

1994. 3. 31

香芝市教育委員会

序　文

奈良県の北西部、万葉の昔から親しまれてきた二上山の麓に香芝市が位置します。

昭和31年に人口15,500人でスタートした町制も平成３年10月に市制施行し、平成６年３月現在の人口においては55,400人を超えるに至っており、伝統産業を継承しながら一方では都市化の傾向を日々増しております。

市内各地には埋蔵文化財や有形・無形の文化財が数多く残されております。近年、大阪の都市圏に隣接する地理的条件からベッドタウンとしての宅地開発等がさかんとなり、それにつれて埋蔵文化財の発掘件数も増加の一途をたどっております。

このたび、平成５年度国庫補助金事業の一環として実施しました市内遺跡４件の発掘調査結果をとりまとめ、その発掘調査概報として刊行することになりました。

この発掘調査を実施するにあたり、ご協力を賜りました地元の方々をはじめ、その他関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、この概報が多くの方々の目に触れ、当市の埋蔵文化財調査について深い御理解、御協力を頂ければ幸甚に存じます。

平成６年３月

香芝市教育委員会

教育長　奥嶋岩一

例　言

1．本書は香芝市教育委員会が平成5年度国庫補助金事業（事業名：市内遺跡発掘調査）の一環として実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、社会教育課二上山博物館学芸員山下隆次、下大迫幹洋がそれぞれ担当した。

3．現地調査を実施するにあたり、尼寺廃寺北遺跡では土地所有者の池田逸二郎氏、池田楢二郎氏および尼寺自治会長の谷村秀雄氏をはじめとする地元の方々のご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

4．遺跡の空中写真撮影は、株式会社アイシーに委託した。

5．本書の執筆はそれぞれの調査担当者が分担し、目次に文責を明記した。なお、編集は山下がおこなった。

目　次

発掘調査位置図・発掘調査一覧……1

1　尼寺廃寺北遺跡……（山下）…2

Ⅰ　はじめに……2

Ⅱ　遺跡の環境……2

Ⅲ　調査の概要……3

Ⅳ　まとめ……6

2　桜ヶ丘第4地点遺跡……（下大迫）…9

Ⅰ　遺跡の環境……9

Ⅱ　調査の概要……9

Ⅲ　まとめ……10

3　藤山遺跡……（下大迫）…11

Ⅰ　遺跡の環境……11

Ⅱ　調査の概要……11

Ⅲ　まとめ……12

4　藤ノ木丁遺跡……（山下）…13

Ⅰ　遺跡の環境……13

Ⅱ　調査の概要……13

Ⅲ　まとめ……14

第１図　発掘調査位置図

発　掘　調　査　一　覧

	遺　跡　名	調　査　地　番	調　査　期　間	調査面積
1	尼寺廃寺北遺跡	尼寺２丁目62・67・70番地	平５．11．26～平６．３．４	200㎡
2	桜ヶ丘第４地点遺跡	穴虫3134	平５．８．11～平５．８．12	20㎡
3	藤山遺跡	藤山２丁目1204－１	平５．９．16～平５．９．25	60㎡
4	藤ノ木丁遺跡	磯壁３丁目115－３	平５．10．27～平５．11．９	72㎡

1　尼寺廃寺北遺跡（尼寺廃寺跡第４次調査）

Ⅰ　はじめに

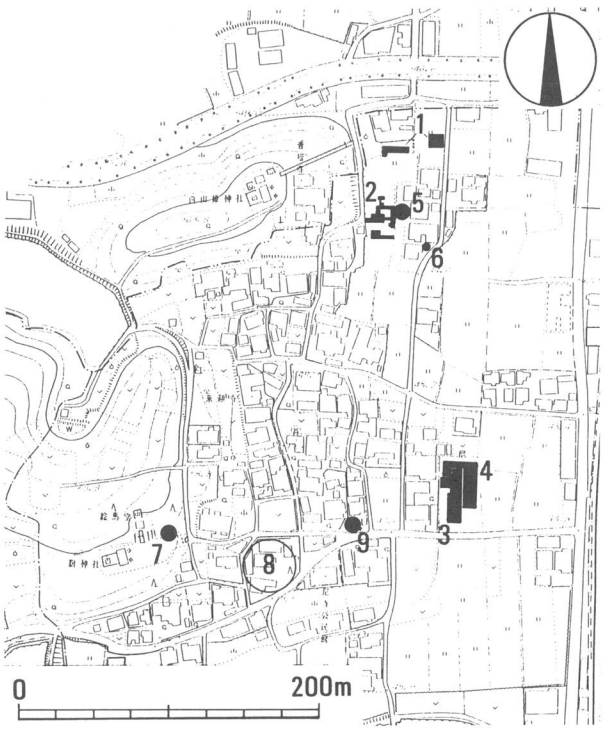
香芝市では、近年急増する開発行為に対して文化財保護の観点から昭和56年度以来、毎年国庫補助金事業を継続的に実施している（現事業名：市内遺跡発掘調査）。その目的は、各遺跡の実態を把握し、今後の開発行為に対応するためのデータ蒐集と自己用住宅の建築に対処するためである。これまでは二上山北麓遺跡群を中心に調査がすすめられ、多くの貴重な成果を得た。そして、平成３年度からは、開発によって景観がかわりつつある尼寺廃寺跡（尼寺廃寺北・南遺跡）の範囲確認調査を開始し、実態不明な寺院跡を解明する端緒となった。

本年度は平成３・４年度に引き続き、範囲確認を目的に尼寺廃寺北遺跡の発掘調査を実施した。

Ⅱ　遺跡の環境

尼寺廃寺跡は奈良県香芝市尼寺に所在する寺院跡である。古くから尼寺の集落内で古瓦が多く出土し、現在も水田の畦畔等で散見できることから寺院跡の存在が考えられきた。周辺地域をみると、尼寺の集落の西に位置する厨神社の裏山の北および西側でサヌカイトの原石が分布しており、打製石器や石鏃が採集されている。また、この神社の境内には登窯と考えられる瓦窯（尼寺窯）があり、さらに、尼寺川をはさんだ南の丘陵にも６世紀後半から８世紀にわたる須恵器や瓦を焼いた窯跡群（平野窯跡群）が存在する（千賀　1983）。

さて、この尼寺廃寺跡であるが、古瓦が大きく北と南の２つの地域に分かれて分布している。北の地域は基壇と考えられる高まりを中心に多く散布している。この基壇と考えられる高まりは２カ所あり、その１つに今も礎石が残っているこ



第２　調査地周辺図

1　第４次調査（平成５年度）　2　第１次調査（平成３年度）
3　第２次調査（平成４年度）　4　第３次調査（民間事業）
5　基壇　6　基壇？　7　尼寺窯　8　般若院　9　薬師堂

とから、平成3年度の国庫補助金事業ではこの西側を調査した。その結果、基壇の基底部と回廊と思われる遺構が検出された（田中　1992）。

そして、南の地域は役行者をまつる薬師堂を中心に古瓦が散布している。この薬師堂には、ほぼ原位置を保っていると考えられる礎石がいくつか残っており、その西約50mにある般若院境内でかつて多くの軒丸瓦や軒平瓦が出土したことから、伽藍の一部がこの場所にあったと推定されている。

平成4年度においてこの南の寺院の東側回廊を確認するために、薬師堂の東約75mの地点を調査した。その結果、期待した回廊は検出できなかったが、尼寺創建当時と考えられる掘立柱建物跡や中世の館を囲んでいたと考えられる溝等を確認した（山下　1993）。

この北の基壇と考えられる高まりと南の薬師堂とは直線距離にして約200mあることや、周辺の地形からみて、北と南の地域のほぼ中央に谷が存在し、この谷筋ではほとんど古瓦が出土しないことから、この尼寺廃寺跡を1つの寺院跡と考えずに、それぞれ北遺跡・南遺跡の2つに分けて考えられてきた。しかし、主要伽藍の位置は未だ不明で今後の調査に期するところが大きい。

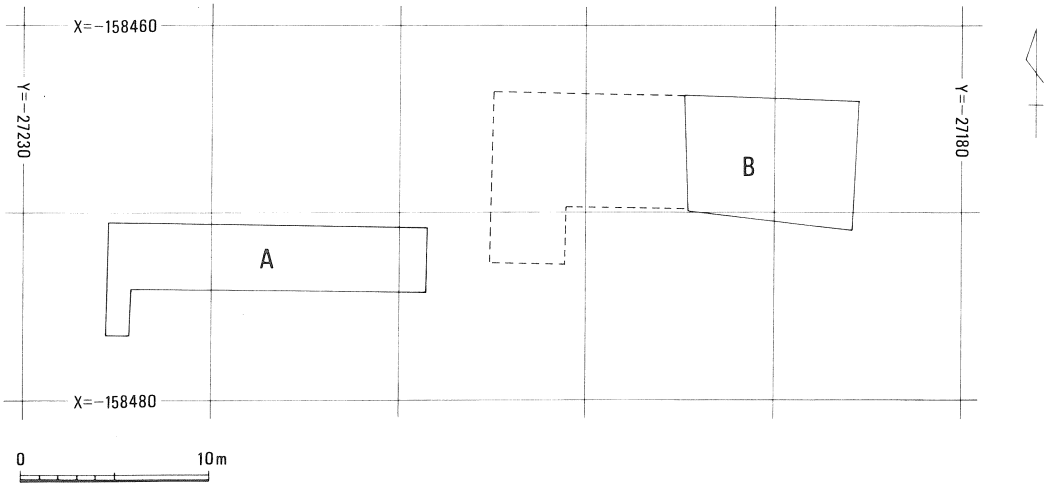
Ⅲ　調査の概要

1　調査の方法と経過

尼寺廃寺北遺跡の発掘調査は、平成3年度に次いで2度目である。調査を実施するにあたって、平成3年度の調査で南北方向に寺院の西側の回廊と思われる遺構が検出されたのでこの回廊の北東角を確認し、さらに東側の回廊を確認することを目的に実施した。調査地は西から尼寺2丁目62・67・70番地でそれぞれA・B・C地区とした。

調査は11月26日から開始した。まず、休耕田となっていたA・B地区の草刈りを行い、A地区に3.5m×16mのトレンチ（Aトレンチ）を東西方向に設定して掘削を開始した。重機で第1層（耕作土）を除去するとその直下（第2層・水田床土）で遺物が検出され始めた。そのため、第2層以下は人力で掘削することにした。遺物はトレンチ西端で密集していたため、この部分を南へ一部拡張した。遺物はこの拡張部分において最も密集していた。

次にB地区の北半で南北6m、東西19m、およびこれに接して西側で南北3m、東西5mのトレンチ（Bトレンチ）を設定し、重機で掘削を開始した。現在、B地区は1つの水田となっているが、かつては中央に畦畔があって水田が東西2つに区画されており、西側の水田が東側より一段高くなっていた。しかし戦後、この一段高かった西側の水田の土を東側へ押して1つの水田にしたということである。そのため、西側では第1層（耕作土）を除去すると直下で地山となり、この面で瓦片が数点出土したが遺構はまったく検出されなかった。しかし、トレンチ東側では第2層（水田床土）直下で瓦片が大量に出土し、何らかの遺構の存在が予想された。また、トレンチ北側で設定した排水溝で土層を観察したところ、トレンチ中央付近で地山が急に落ち込んでおり東端では地表から約1.7mとかなり深く、大量の排土が予想された。さらに、この落ち込んだ地山の直上から約1.0mの



第３図　トレンチ配置図

厚さで瓦が大量に出土した。そのため、まったく遺構が検出されなかったトレンチ西側を埋め戻し、東側中心に調査をすすめることにした。この大量の瓦は排水溝を設定したトレンチ北側に多くあり、第５層まで除去した段階で土坑の掘り方が検出されたため瓦溜めであることがわかった。そして、この瓦を取り上げて遺構面を平面精査したところ、土坑から南に続く溝が検出された。そして、この溝を完掘した段階で当初予定していた期間を過ぎたため、Ｃ地区の調査については後日に委ねることにし、３月４日に埋め戻しを完了して現地調査を終了した。調査作業員は延べ270人、補助員は延べ295人を要し、現地調査の実働は57日であった。

２　おもな遺構・遺物

(1)　遺　構

Ａトレンチ（第４図）

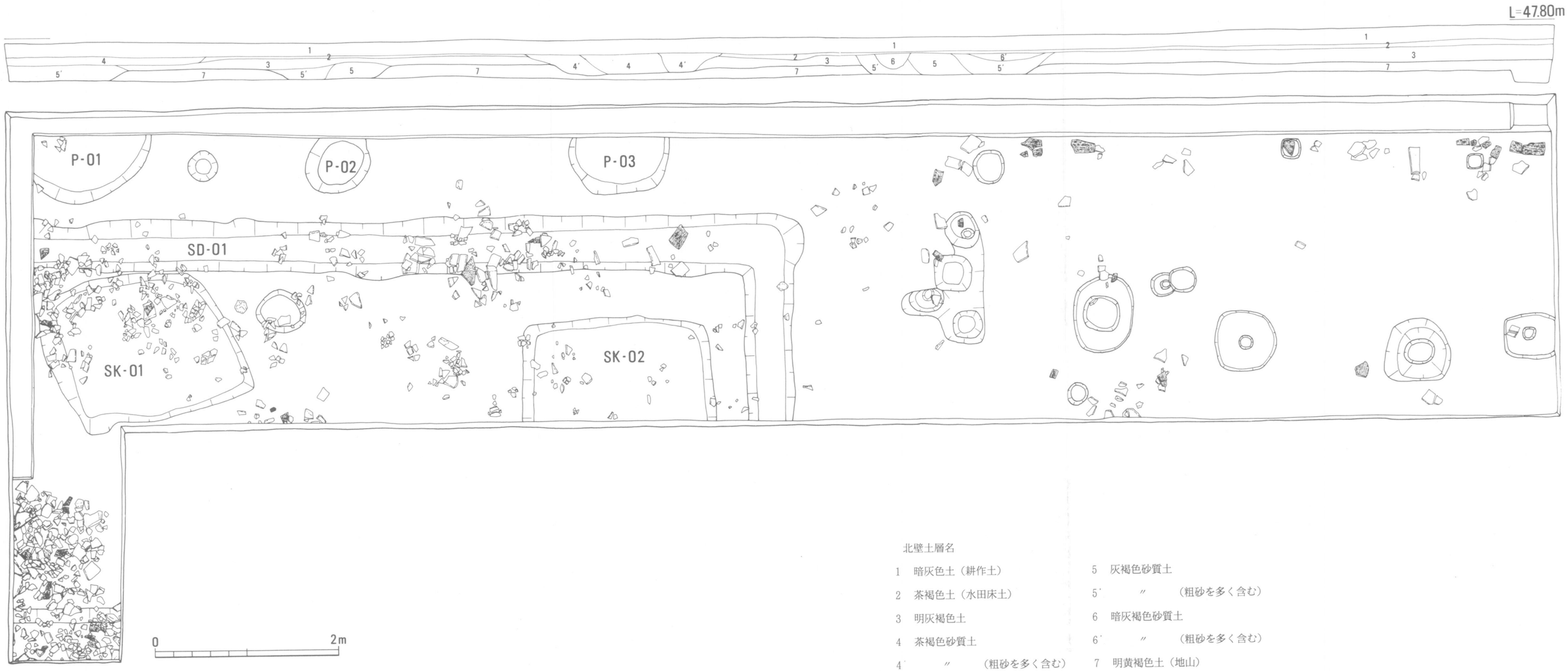
トレンチ西半で溝１条の他、土坑、柱穴と思われるピットを検出した。また、トレンチ東半でも柱穴と思われるピット等を検出した。

検出した遺構面は第２層（水田床土）直下で、現地表面から0.15ｍ～0.2ｍとかなり浅いことや遺構の遺存状況があまりよくなかったことから考えると、本来の遺構面は耕作等によりすでに削平されたと思われる。以下、おもな遺構について述べる。

SD－01はトレンチ西端から東へのび、トレンチ中央付近で南へ直角に曲がっている。検出した部分で東西8.2ｍ、南北2.3ｍ、幅0.5～0.6ｍ、深さ0.1ｍ。溝の埋土から、瓦片が若干出土した。この溝に囲まれた部分で土坑を２基、北側で柱穴を検出した。

SK－01は南北1.6ｍ、東西2.2ｍ、深さ0.1ｍの不整形な長方形で埋土から多量の瓦片が出土した。

SK－02は南北1.1ｍ以上、東西2.2ｍ、深さ0.1ｍで方形を呈すると思われる。埋土から瓦片が出



北壁土層名

1　暗灰色土（耕作土）
2　茶褐色土（水田床土）
3　明灰褐色土
4　茶褐色砂質土
4'　〃　（粗砂を多く含む）
5　灰褐色砂質土
5'　〃　（粗砂を多く含む）
6　暗灰褐色砂質土
6'　〃　（粗砂を多く含む）
7　明黄褐色土（地山）

第4図　Aトレンチ平面図・北壁土層図

土した。

SK－01、SK－02の性格は不明であるが、礎石の抜き取り穴の可能性が考えられる。

P－01はトレンチ北西端で検出した。SD－01から0.2ｍはなれている。直径は推定で約1.5ｍ、深さ0.1ｍ。埋土から瓦片数点が出土した。

P－02もSD－01から0.2ｍの距離にあり、直径約0.7ｍ、深さ0.3ｍでほぼ円形である。埋土から遺物は出土しなかった。

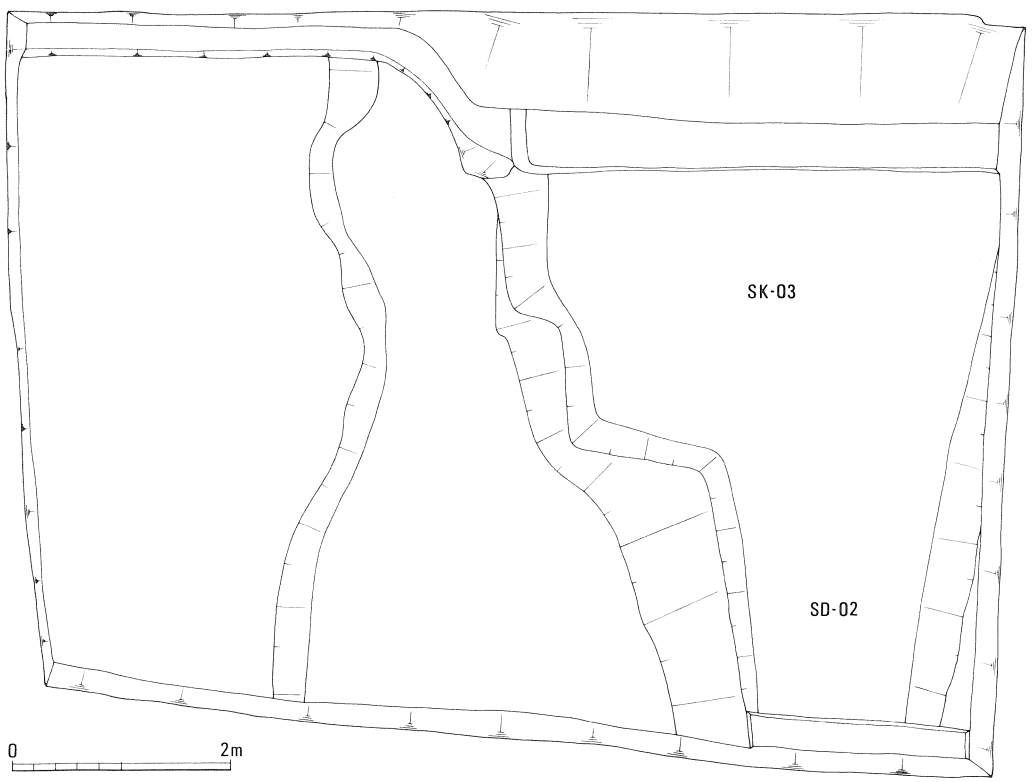
P－03もSD－01から0.2ｍの距離にあり、東西約1.1ｍ、南北は推定で約1.1ｍ、深さ0.1ｍでほぼ方形を呈すると思われる。埋土から遺物は出土しなかった。

P－01、P－02、P－03の間隔は各3.0ｍで、等間隔にならぶことから柱穴と考えられる。

Ｂトレンチ（第５図）

トレンチ西側は第１層（耕作土）直下で地山となり、この面で精査したが遺構は検出できなかった。しかし、トレンチ東側では溝と瓦溜めを検出した。

SD－02はトレンチの東端で検出した。ほぼ南北方向にのびており、南側で幅1.8ｍ、深さ0.3～0.5ｍを測る。そして、トレンチ中央付近でSK－03に切られている。埋土には瓦が大量に含まれており、底には青灰色の粘質土が堆積していた。



第５図　Ｂトレンチ平面図

SK－03（瓦溜め）はトレンチ北東端で検出した。第5層上面で掘り方を検出したが、その上面の第3層・第4層においても瓦が大量に密集している状況であった。土坑は南北3m以上、東西約3.5m、深さ0.4～0.5mを測る。南北の大きさについてはトレンチ北壁まで続いており推定できない。この瓦溜めからは、整理箱で400箱をこえる大量の瓦とともに、近世の天目茶碗や壁土が出土した。

このSD－02とSK－03の関係については、まず、SK－03を検出し、そして平面精査の結果SD－02を検出したことから、当初この部分にはSD－02があって、このSD－02が埋没した後にSK－03が掘られたと考えられる。このSK－03が掘られた時期については天目茶碗から考えて近世と思われる。

(2) 遺　物（第6図）

BトレンチのSK－03から大量の瓦が出土した。以下、おもな瓦について述べる。

1は中央に珠点がある3重圏文軒丸瓦である。2も中央の珠点は確認できないが、1と同じく3重圏文軒丸瓦である。他に1点出土している。

3は4重圏文軒丸瓦で中央に1＋4の蓮子をもつ。この資料は中心の蓮子が磨滅しているため拓本ではわかりにくいが、肉眼で観察するとかすかに残っているのが確認できる。また、これと同様の瓦が他に1点出土している。

4は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で2点出土した。外縁に鋸歯文をめぐらし、蓮子は1＋7＋13である。

5は中房に1＋6＋10の蓮子を配した複弁8弁蓮華文軒丸瓦で2点出土した。

6・7は単弁12弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1＋8の蓮子を配している。この瓦が最も多く5点以上出土している。

8は三巴文軒丸瓦である。

9は内区に左から右に流れる偏行唐草文をおき、下外区と脇区に線鋸歯文を配する軒平瓦である。

10・11は3回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区に珠文を配す。

12は連珠文軒平瓦である。

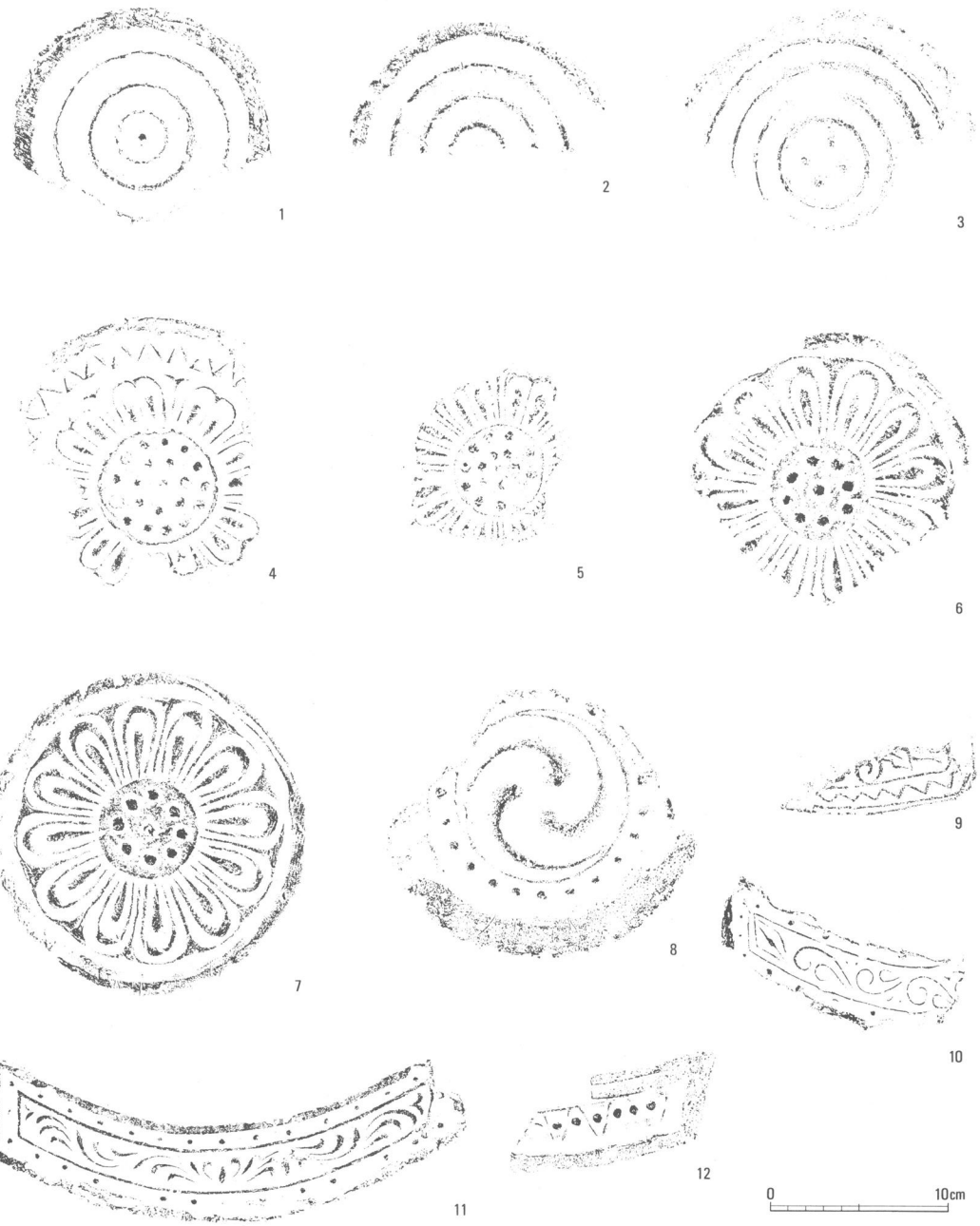
その他、連巴文軒平瓦が1点出土している。

なお、平成3年度の調査では3・4・6（7）・11と同様の瓦が出土している。

Ⅳ　まとめ

今回の調査で期待された回廊は検出できなかったが、Aトレンチ西側で溝や礎石の抜き取りと考えられる土坑、柱穴と考えられるピット等を確認したことで、この付近に何らかの建物が存在することがうかがえた。また、Bトレンチ東端で大量の瓦を廃棄した瓦溜めが検出され、瓦に混じって壁土が出土したことからこの付近にも建物があったことがうかがえた。

これらの調査結果を総合すると、Aトレンチ南側の水田が一段高くなっており、Aトレンチ拡張区南端で確認した地山の落ち込みから考えると、何らかの建物がAトレンチの南側に存在する可能



第6図　ＳＫ－03出土瓦

性が高い。また、東側の回廊についてはＢトレンチの中で確認できなかったので、Ｂトレンチ東側か南側に存在するのではないかと思われる。いずれにしても、今後の調査に期待されるところが大きい。

参　考　文　献

田中史生　1992　『尼寺廃寺北遺跡発掘調査概報』　香芝市教育委員会
千賀　久　1983　「北葛城郡香芝町平野窯跡群発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』)
山下隆次　1993　『尼寺廃寺南遺跡発掘調査概報』　香芝市教育委員会

２　桜ヶ丘第４地点遺跡

Ⅰ　遺跡の環境

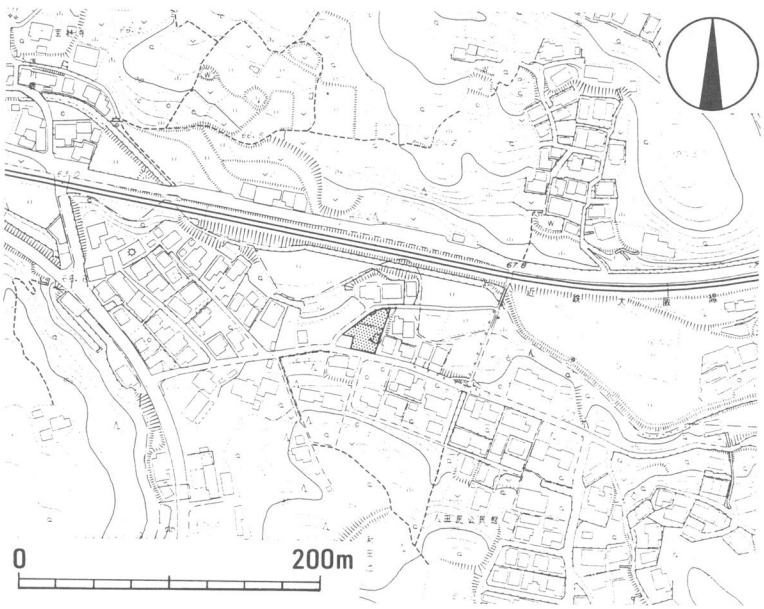
桜ヶ丘第４地点遺跡は、香芝市穴虫3134（小字赤土平）付近に所在する旧石器時代の遺跡である。当遺跡は鷲野憲成氏の発見にはじまり、昭和57年にナイフ形石器や楔形石器などが採集・報告され、遺跡の存在が知られるようになった（松藤　1982）。

遺跡は、関屋盆地の中央部を東から西に流れる前川（原川の支流）の南岸、前川を臨む北方へ舌状に張り出した標高約68ｍ前後の緩やかな丘陵の先端部付近に立地しており、前川の河床との比高差は２ｍ前後という二上山北麓に分布する遺跡群の中でも比較的低地部に所在する遺跡の１つである。付近一帯は、宅地造成によって大規模な破壊を受けているものの、遺跡の西方には桜ヶ丘第１地点遺跡が、東方には桜ヶ丘第２～３地点遺跡や鶴峯荘第２～４地点遺跡など後期旧石器時代を中心とした縄文・弥生時代にかけての著名な石器生産遺跡や遺物散布地が密集しており、石器研究の宝庫として重要視されている地域である。

Ⅱ　調査の概要

今回の発掘調査は個人住宅建築のため、平成５年６月30日付けで施主から「発掘届出書」が提出されたことに起因する。香芝市教育委員会では、その申請地が周知の遺跡である桜ヶ丘第４地点遺跡の範囲内に位置することから、施主と協議をおこない、同年８月11日より発掘調査を実施することになった。

付近一帯はすでに宅地開発によって丘陵頂上や斜面が削平・造成されるなど、著しく旧地形が改変されており、旧地形の把握も困難であることから、旧地形の把握とともに地下遺構の存在や遺物の有無確認のため、調査地西端に丘陵の主軸に沿って１×10ｍの南北トレンチ（Ａトレンチ）を設定して重機による試掘調査を実施した。そして、遺構や



第７図　調査位置図

遺物の分布状況によっては本格的なグリッド調査へ移行することにした。

基本層序は以下の通りである。

第１層　黄褐色砂質土（表土　層厚約70～80㎝）

第２層　明茶褐色砂質土（層厚約10㎝）

第３層　暗茶褐色土（層厚約1.1～1.2ｍ以上　トタン板、レンガ、コンクリート塊等を含む）

まず、第１層は宅地造成に伴う客土、第２層は第３層の土色素が第２層に浸透した第３層の影響化層、第３層は宅地造成時に投棄されたと考えられる産業廃棄物の堆積層で、強烈な刺激臭を伴い安全性の面から調査続行が不可能な状況であったため、土層柱状図の作成、および写真撮影後、即座に埋め戻した。

次に、調査地東端でも１×10ｍの南北トレンチ（Ｂトレンチ）を設定して掘削したが、Ａトレンチと同様に、ここでも産業廃棄物の堆積層である第３層が現われたため、即座に埋め戻した。したがって、この第３層（産業廃棄物層）以下については調査は不可能であったため、付近の基盤層検出には至らなかった。また、遺物についてもサヌカイト片等がまったく出土しなかったため、本格的なグリッド調査は実施せず、翌日、機材の撤収作業等をおこなって調査を終了した。

Ⅲ　まとめ

以上の通り、今回の発掘調査では調査区を深く掘削することができなかったので、残念ながら良好な遺物包含層や基盤層の確認および旧地形の把握には至らなかった。

遺跡周辺は、現況では北に向かって舌状に張り出した緩傾斜地の様相を呈しているが、当遺跡のすぐ東方隣地には、比高差の高い急峻な崖面が迫っており、自然地形にしては不自然な点も多々ある。今回の調査地は、多くは盛土により後世に地形改変されている。地下にどれだけ旧地形や遺構面が改変を受けずに残されているか不明であるが、今後の調査によって遺跡の実態解明に努力する必要がある。

参　考　文　献

松藤和人　1982　「桜ヶ丘第４地点遺跡」『旧石器考古学』25

3　藤山遺跡

Ⅰ　遺跡の環境

藤山遺跡は、通称「藤山丘陵」もしくは「藤山台」とよばれる標高約58ｍ前後の低い丘陵を中心に半径約150ｍにわたって分布すると推定される遺跡である。

調査地の東方には古墳時代後期の数基からなる北今市・藤山古墳群が、北方には現在、陵墓として治定されている「顕宗天皇陵」が所在する。当遺跡は、過去数次にわたって発掘調査がなされており、丘陵南東部で平成２年度に実施された文化センター建設に伴う発掘調査では、古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物跡が数棟まとまって検出されている。今回の調査地は、この「藤山丘陵」の北西端、丘陵直下の谷部分に位置する。

第８図　調査位置図

Ⅱ　調査の概要

今回の発掘調査は個人住宅建築のため、平成５年８月29日付けで施主から「発掘届出書」が提出されたことに起因する。香芝市教育委員会では、周知の遺跡である藤山遺跡の範囲内に位置することから施主と協議をおこない、発掘調査を実施することとなった。

調査地は、以前に大規模な造成を受けており、重機の作業範囲、排土量を考慮して調査地中央部に南北５ｍ、東西20ｍの調査区を設定して掘削を開始した。しかし、予想以上に盛土量が多く、西から約12ｍ掘削した時点で土置き場が満杯となり、これ以上東へトレンチを拡張することが不可能となったため、この範囲で発掘、精査に努めることにした。

基本層序は、以下の通りである。なお、地表から第８層までは約2.6ｍである。

第１層　黄褐色砂質土層（表土　関屋地方からの客土、安山岩系礫・コンクリート片含む）

第２層　暗灰色粘質土層（旧耕作土）

第３層　灰褐色粘砂層（水田床土）

第４層　暗灰褐色粘砂層（微～細砂）

第５層　灰色砂質土層（細～中粒砂）

第６層　黄褐色砂層（鉄分を多く含む）

第７層　黄褐色粘質土層（層上面にマンガン斑粒を普遍的に含む）

第８層　灰色シルト層（湧水多い、腐植土含む）

第８層以下は湧水が激しく、これ以下では遺構・遺物等の存在する可能性が少ないことから、多少遺物の含まれる７層上面で遺構の検出に努めた。

しかし、遺構等はまったく検出できず、第７層やその上面を薄く被覆する第６層（洪水砂層か？）から古墳時代後期に相当するTK－209型式の須恵器坏身の口縁部細片２点と、中世以降と推定される時期不明の土師器細片２点が出土したのみであった。ただ、第７層上面には部分的に砂層（第５・６層）によって充填されたくぼみがあり、また、マンガン斑粒の集積状況等から中～近世の水田面とも想定されたが、明確な畦畔や足跡等は検出できず、小範囲の面積では水田跡か否か判断することはできなかった。

最終的な調査面積は60㎡、調査期間は９月16日～９月25日までで、実働は７日を要した。

Ⅲ　まとめ

当初の予想通り、今回の調査地が周知の遺跡範囲の端にあたり、かつ、丘陵末端下の谷部に位置するせいか、顕著な遺構・遺物等を確認することはできなかった。しかし、藤山古墳群や藤山遺跡の形成時期にあたる古墳時代後期に属する須恵器の破片２点が出土しており、周辺の丘陵上にこれらの遺物に関連する何らかの遺跡が存在していたことを裏付けている。

付近一帯は特に住宅開発が活発におこなわれており、すでに丘陵上に位置する大半の遺構は破壊されているものと思われるが、同丘陵上には、わずかながらも改変を受けずに残された自然地形や古墳状隆起が部分的に点在しており、今後、開発に際しては最善の注意を払っていく必要がある。

参　考　文　献

佐藤良二編　1991　『藤山遺跡発掘調査概報』　香芝町教育委員会

4　藤ノ木丁遺跡

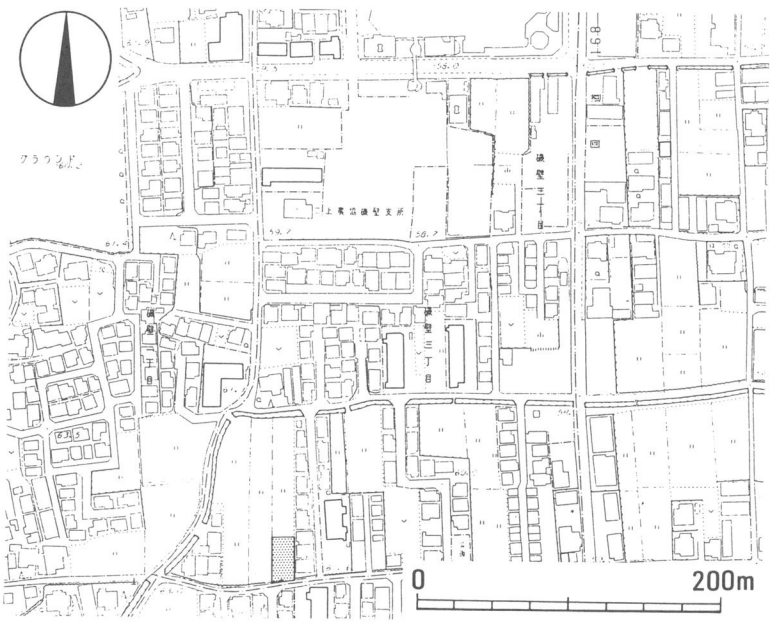
Ⅰ　遺跡の環境

藤ノ木丁遺跡は香芝市磯壁ほかに所在する、古墳時代中心の遺跡である。昭和63年に当遺跡の発掘調査が最初におこなわれた。その結果、水路、溝、土坑などの遺構が検出され、古墳時代前期から後期初めにわたる遺物が出土した（佐藤・青木　1989)。また、平成５年度の調査（93－２次）では弥生時代後期後半の一括遺物とともに、葛城地域で初めて手焙形土器の破片が２点出土した（山下・下大迫　1994)。調査地の周辺地域をみると、北西約700ｍには、この遺跡に続く古墳時代後期から奈良時代の掘立柱建物群が検出された藤山遺跡（佐藤編　1991）が所在し、東約500ｍには全長約140ｍの前方後円墳の狐井城山古墳（５世紀末～６世紀初頭）がある。また、北東約800ｍには縄文時代早期の押型文土器１点をはじめ、縄文時代晩期にわたる土器が出土した下田東遺跡（小泉・辻・山下　1980）がある。今後、当遺跡の調査が進めば狐井城山古墳を造営した集団に関係する遺構等が検出される可能性がある。

Ⅱ　調査の概要

今回の調査は磯壁３丁目115－３番地において、自己用住宅が計画されたため発掘調査を実施することになった。これまで、当遺跡の調査は遺跡推定範囲の北側しか実施しておらず、今回はじめて南側を調査することになり遺跡全体を把握する上で重要な調査となった。

まず、平成５年10月20日付けで施主から「発掘届出書」が提出され、香芝市教育委員会が施主と協議をおこなった。その結果、現在水田となっている土地の周囲に擁壁を構築して約１ｍ盛土し、その後住宅建築する計画であったため、擁壁工事前に発掘調査することになった。



第９図　調査位置図

発掘調査は、10月27日から開始した。まず、基本層序及び地下遺構の有無を確

認するため、調査地の中央部に幅４ｍ、長さ18ｍのトレンチを南北方向に設定して掘削を始めた。

しかし、水田造成に伴う整地層から奈良時代の須恵器坏身片１点と近世と考えられる土師器皿の細片が１点出土したのみで、遺構は検出できなかった。そして、11月９日に埋め戻しを完了して現地調査を終了した。実働は４日を要した。

Ⅲ　まとめ

今回の調査地は遺跡推定範囲の南西端に位置し、中心から離れていることもあって、遺構は検出できなかった。しかし、これまで未調査地域であった部分の基本層序や遺構・遺物の有無等を把握できたことで今後の調査に有益な知見をもたらした。

参　考　文　献

小泉俊夫・辻　俊和・山下隆次　1980　「押型文土器を出土した香芝町下田東遺跡㈠」『青陵』第46号
佐藤良二・青木勘時　1989　『藤ノ木丁遺跡発掘調査概報』　香芝町教育委員会
佐藤良二編　1991　『藤山遺跡発掘調査概報』　香芝町教育委員会
山下隆次・下大迫幹洋　1994　『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報　２』　香芝市教育委員会

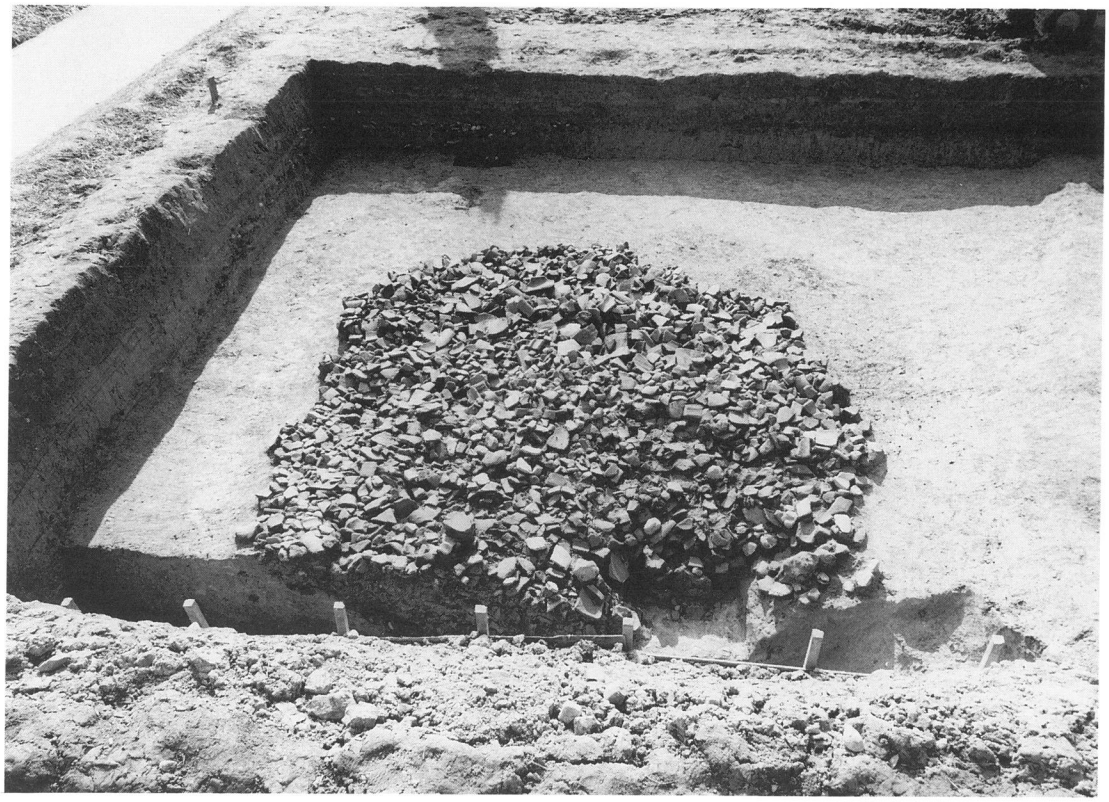
調査地全景（航空写真　上が北）

調査地全景（航空写真　上が南）

Aトレンチ全景（航空写真　上が北）

Aトレンチ遺物出土状況（西から）

Bトレンチ全景（航空写真　上が北）

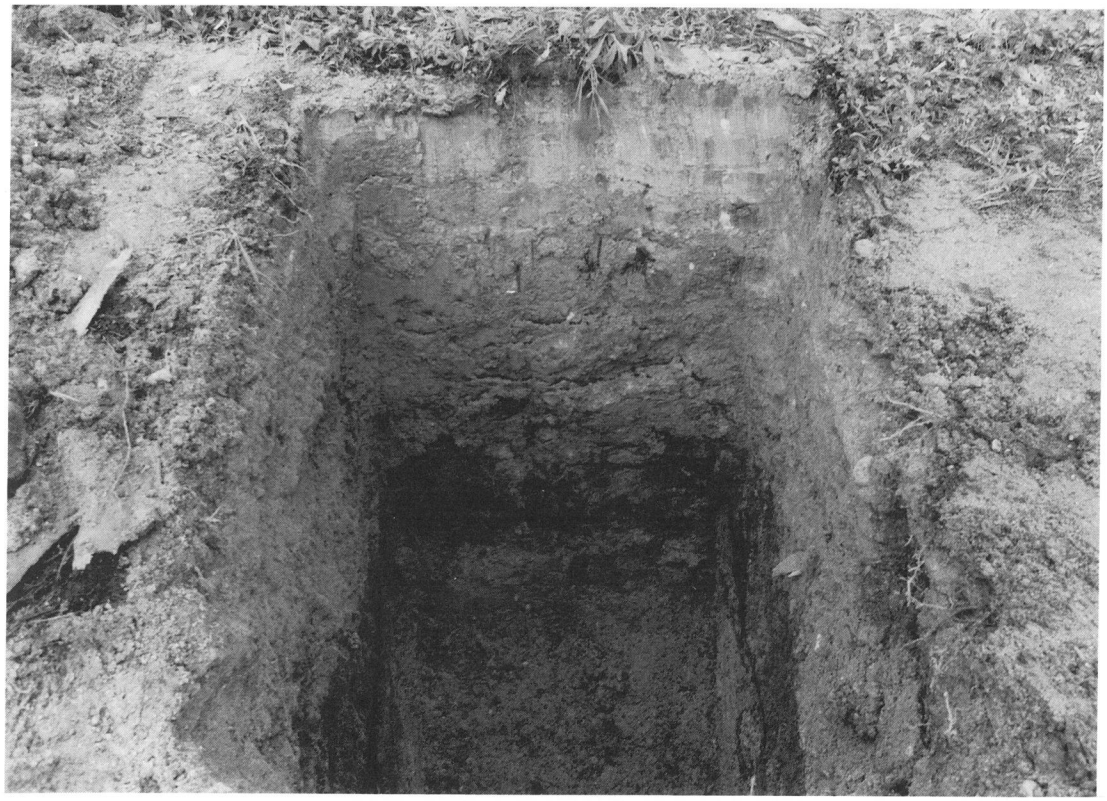


ＳＫ－03遺物出土状況（北から）

ＳＤ－02南壁地層断面

ＳＤ－02、ＳＫ－03完掘状況（北から）

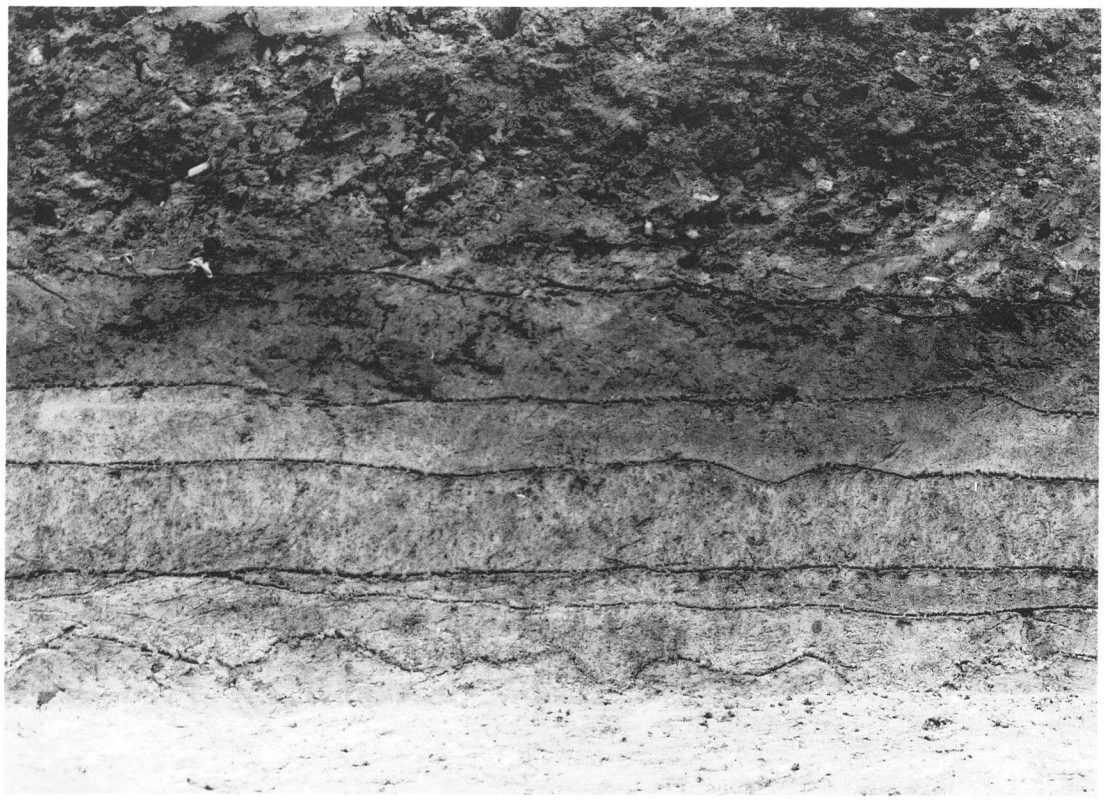
調査前の景観（北から）



Aトレンチ南壁地層断面

調査前の景観（東から）

調査風景（西から）



北壁地層断面

トレンチ全景（東から）

調査前の景観（南から）

調査風景（南から）

南壁地層断面

トレンチ全景（南から）

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報　1

— 平成5年度 —

編集発行　香芝市教育委員会

香芝市本町1397番地

印刷　明新印刷株式会社

奈良市南京終町3丁目464番地